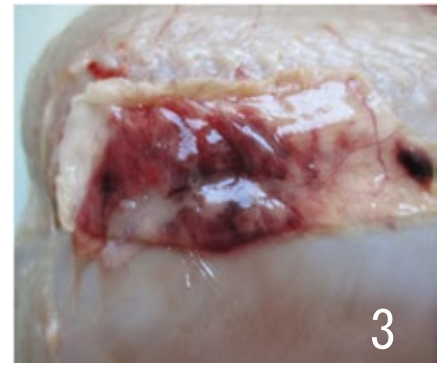


疾病 (異常)	26 炎症(皮膚、筋肉の炎症)
肉 眼 所 見	<p>1 痂皮性皮膚炎</p> <ul style="list-style-type: none">・大腿部、背部、腹部などの表皮に局限して発生し、皮下織に波及しない。・病変部の皮膚は脱羽し黄褐色を帯び、羽包部がやや腫張し、多量の痂皮により覆われる。・痂皮の形成は軽度で、皮膚が淡明化して広範囲に肥厚する場合もある。 <p>2 壊疽性皮膚炎</p> <ul style="list-style-type: none">・春季に発生しやすい。罹患領域は胸部、腹部、翼部あるいは大腿部に好発する。・病変は皮膚、皮下織、同直下の筋組織に局限し、皮膚に紫赤色斑、皮下織と筋組織にうっ血、水腫などがみられる。・農場の発生情報に一致し、処理場では同一ロットで確認される。「出血」とは区別する。 <p>3 胸部嚢胞</p> <ul style="list-style-type: none">・同一ロットに多発する傾向がある。・胸骨滑液包に液状成分が貯留して、嚢胞状に拡張している。・貯留した液状成分は漿液性で、細菌などの二次感染があれば混濁する。・経過が長びくと周囲の皮下織が水腫になったり、結合組織が増生したりする。 <p>4 被嚢化膿瘍</p> <ul style="list-style-type: none">・蜂窩織炎のび慢性病変とは区別する。左右いずれかの内股部に隆起状の結節病変として認められることが多い。・皮膚の色は淡黄色や黄色を呈し、隆起はその膨らみが明瞭なものや滑らかなものがあり、多くは硬結感がある。・皮下織の病変は限局的であり、結合織に包まれた病巣にはチーズ様物や滲出液を入れ、血様物が混じることもある。 <p>5 化膿性筋炎</p> <ul style="list-style-type: none">・著しい発育不良と左右脚の対称を併せ持つ個体において、病変の多くは細い側の片脚に存在し、筋肉を主体に関節に波及することもある。・皮膚の色は正常もしくは部分的に淡桃色を帯び、稀に足関節の周囲に出血や黄色化が認められるものがある。・大腿と下腿の両方あるいはいずれかの筋肉間に滲出液や黄色チーズ様物が認められる。・筋肉病変に隣接する関節は時に滑膜が肥厚し、関節腔にチーズ様物を入れている場合がある。 <p>6 肩関節を被う腹側皮膚の黄色病変、肩関節炎、筋膜炎</p> <ul style="list-style-type: none">・手羽元起部の腹側の皮膚が黄色を呈し、切開すると肩関節に化膿性炎が認められる。・浅胸筋や深胸筋の筋膜に肩関節炎及び周囲炎から波及したとみられる化膿性炎がみられ、筋膜の肥厚やチーズ様物の付着が認められることが多い。
廃棄等 の根拠	別表第10又は別表第11

疾病
(異常)

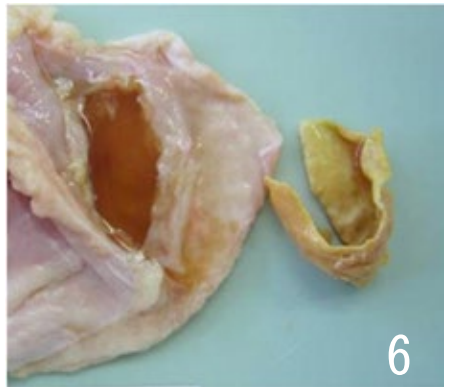
26 炎症 (皮膚、筋肉の炎症)



癬皮性皮膚炎：皮膚に広範な黄褐色のワッフル様癬皮病変が認められる。

壊疽性皮膚炎：紫赤色斑が胸部、翼部および下腿部にみられる。

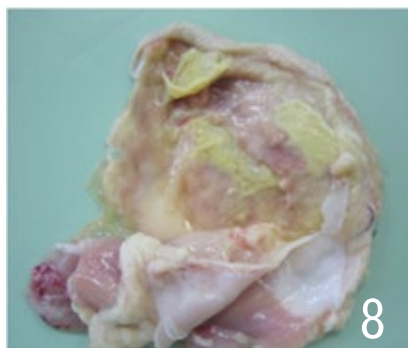
左の病変部を剥皮すると皮膚直下の皮下組織は、うっ血と水腫が顕著である。



胸部嚢胞：胸骨滑液包内に血液、液体成分、粒状滲出物等が貯留している。

被嚢化膿瘍：左内股部に淡黄色の明瞭な隆起状結節が認められる。

No5 の隆起状結節を切開すると滲出液と巻状のチーズ様物を入れている。



被嚢化膿瘍：左内股部に淡黄色で滑らかな隆起状結節が認められる。

No7 の隆起状結節を切開すると湿潤な板状のチーズ様物を入れた結合組織で限局して包まれている。

化膿性筋炎：病変は削瘦・発育不良と左右脚の対称を併せ持つ個体の比較的細い側の片脚に認められることが多い。

 <p style="text-align: right;">10</p>	 <p style="text-align: right;">11</p>	 <p style="text-align: right;">12</p>
<p>No9 の大腿部を切開すると筋肉間に粒状の黄色チーズ様物が充満している。</p>	<p>No9 では大腿部及び下腿部膝関節を起点にして、筋肉間に黄色チーズ様物や滲出液が貯留している。</p>	<p>肩関節を被う腹側の皮膚に黄色部位がみられ、肥厚が認められる。肩関節に化膿性炎がみられている。</p>
 <p style="text-align: right;">13</p>		
<p>No12 を切開すると浅胸筋や深胸筋の筋上膜に黄色のチーズ様物が付着している。</p>		